

精神発達遅滞児の早期訓練

石原 昂 東京都立多摩療育園

古屋俊明 東京都立多摩療育園

中島未美 東京都立多摩療育園

石田宏代 東京都立多摩療育園

まえおき

精神発達と運動発達の間には相関があり、精神発達遅滞児の多くに運動発達の遅滞がみられる。この運動発達遅滞に対する運動療法を早期に開始することによって運動発達を促進させることが可能であり、更にこれが精神発達に好ましい効果を及ぼしうるのではないかと推測することができる。

このような考え方から、われわれは精神発達遅滞に対して早期に運動療法を開始するよう努めてきた。以下、これまでの経験から得られた幾つかの点について要約してのべる。

対象

昭和51年5月の業務開始以来58年12月までの7年8カ月間に、当施設を訪れた障害児のうち運動療法の対象としたものは816例で、このうち精神発達遅滞と診断されたものは234例で28.5%に当たる。なお、変性疾患、代謝異常、筋疾患などで精神発達遅滞を伴うものは除外した。染色体異常症はこれに含め、また先天性心疾患、小奇形などの合併症を有する例はこれに含めた。

染色体異常症は60例(36%)で、うちダウン症は47例であった。

234例に対する運動療法の開始時年齢は0才、69例・1才、96例・2才、29例・3才以上40例であり、0才、1才児が165例で全体の70%を占めている。なお、6カ月未満は11例であった。

訓練方法と評価法

運動療法ではVojta、Bobath その他の訓練方法を各症例の条件に応じて用いており、特定の手法のみを用いていない。運動機能の評価はJohnson Zuckの運動発達テストを基本として乳幼児に適するよう当園で改訂したものを用いた。精神発達検査としてはMCC ベビーテスト、津守稲毛式乳幼児発達検査を併用した。

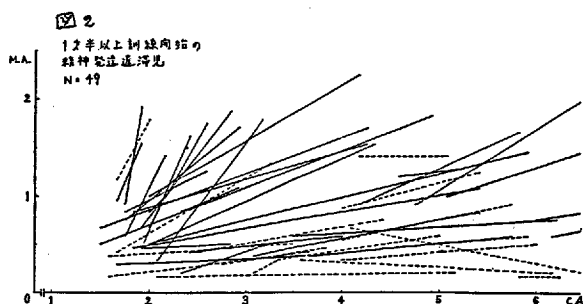
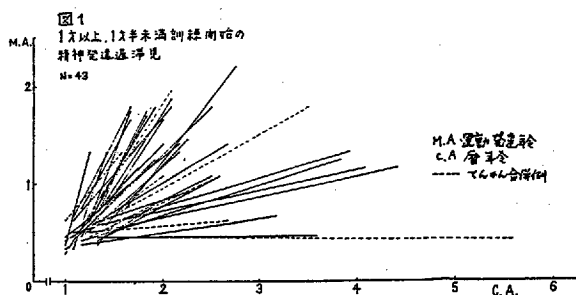
結果

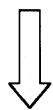
①運動療法開始時年齢が1才から1才6カ月未満のグループと1才6カ月以上のグループに分けてその運動発達の経過をみると図1・2のごとくであった。即ち訓練開始時年齢の低い例の方が発達速度の早い傾向を示すことが分る。なお、1才未満のグループの発達傾向は図1とほぼ類似しており大きな差はみられなかった。

②精神発達指数の低い例ほど運動発達速度が鈍く、運動機能は低いレベルにとどまる傾向が大きい。

③てんかんを有し、これがコントロールされていない例では運動療法の効果が少ない。しかし、薬物により良くコントロールされている例では影響は少ない。

④染色体異常症のうちダウン症の発達は総じて良好であるが、他の異常症(4p-、5p-など)では対照的に著しく悪い。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



結果

運動療法開始時年齢が1才から1才6ヵ月未満のグループと1才6ヵ月以上のグループに分けてその運動発達の経過をみると図1・2のごとくであった。即ち訓練開始時年齢の低い例の方が発達速度の早い傾向を示すことが分る。なお、1才未満のグループの発達傾向は図1とほぼ類似しており大きな差はみられなかった。

精神発達指数の低い例ほど運動発達速度が鈍く、運動機能は低いレベルにとどまる傾向が大きい。

てんかんを有し、これがコントロールされていない例では運動療法の効果が少ない。しかし、薬物により良くコントロールされている例では影響は少ない。

染色体異常症のうちダウン症の発達は総じて良好であるが、他の異常症(4P-、5P-など)では対照的に著しく悪い。